論　説

編集者としての五百木飄亭

石　川　徳　幸

政経研究　第五十六巻第三号（二〇一九年九月）

1．はじめに

愛媛県松山市日の出町は、かつて伊予国小坂村の新場所と呼ばれ、手漉き和紙の生産が盛んであったことから紙の里として知られた。

現在、日の出町を訪ねてみると、金刀比羅神社を石手川の対岸にのぞんだ土手沿いに小さな公園があり、そこには正岡子規と五百木飄亭（本名、良三[1]）の顕彰碑が並んでいる。本稿の主題に示した五百木飄亭は、この新場所において、松山藩士である父作平の長男として1871年2月3日（明治3年12月14日）に誕生した。

1－1. 先行研究と本稿の位置づけ

五百木飄亭（1871－1937）は、明治中期から昭和初期にかけて活躍した俳人であるが、俳人としての業績のほかに、医師、新聞記者、政治活動家、出版社社長といった多様な経歴を持つ人物である。メディア史の領域に関しても、飄亭は1901年に貴族院議長だった近衛篤麿が創らせた雑誌『東洋』の編集長を務めたほか、1929年から1937年までのあいだには政教社の社長として雑誌『日本及日本人』を主宰している。飄亭のこうした経歴には、正岡子規との出会いが深く関わっている。しかし、正岡子規との関係から飄亭の名は近代文学の領域において一定の知名度を得ているものの、飄亭個人の活動の全容は長らく明らかにされてこなかった。

しかし、近年になって、飄亭の新聞記者時代や政治活動家としての

活動に関する研究成果が発表されるようになってきたほか、初めて本格的な評伝が出版されるなど、飄亭に関する再評価が行われるようになった。例えば、飄亭に関する唯一ともいえる本格的な評伝として、松本健一『昭和史を陰で動かした男：忘れられたアジテーター・五百木飄亭』（新潮選書、2012年）がある。松本書は近代政治史における五百木飄亭の位置づけを＜浪人＞として論じたものであり、その＜浪人＞としての位置づけを決定づけた契機は日露講和条約反対運動にあったと紹介している(2)。同書では、五百木飄亭が丸山眞男のいうところの「天皇制ファシズム」を支えた浪人でありながら、丸山眞男以降の研究者に一度も取り上げられなかった理由について、以下の点を指摘している。すなわち、五百木飄亭には北一輝や井上日召のような非日常的なカリスマの要素がみられず、むしろ浪人仲間からの人望の厚い「無邪気な善人」であったために、浪人の代表的存在として見なされなかったという点である。政治活動家としての五百木飄亭が閑却されてきた理由は、松本書の指摘のとおりであろう。近年に至って、五百木の政治活動やメディア史上の業績に関する研究が整理されつつある(3)。

一方、文人としての業績に関しても、正岡子規という偉人の陰に隠れて注目されてこなかった。飄亭自身が主題として論じられた例は稀有であり、例えば山上次郎『歌人森田義郎と子規・飄亭』（古川書房、1972年）などのように、周辺人物との関係の中で取り上げられているものはあったが、飄亭の業績は正岡子規に関連する文脈の中で簡単に取り上げられることが多く、飄亭を主題とした研究は管見の限りにおいてほとんど見られなかった(4)。もちろん、史料の少ない五百木飄亭を研究するにあたっては、周辺人物との関係からアプローチする方法は有用であり、本稿でもそうした手法を採用する。ここで指摘しておきたい点は、これまでの研究の視座において、飄亭が果たした業績に関しても正岡子規を中心に捉えてきたために、飄亭の役割が過小評価されてきた嫌いがあるということである。

また、先述のように飄亭はメディア史の領域において注目すべき役

割を果たしているにも関わらず、とりわけ彼の晩年の業績に関しては、死後に刊行された『飄亭句日記』を除いて、ほとんど知られていないのが現状である。また、彼のそうした活動の源流ともいうべき、句作を中心とした文芸活動に関しても、十分な整理がなされていない。

こうした先行研究の状況を踏まえ、本稿の目的は、多様な経歴を持つ飄亭の生涯の中で、前掲の先行文献の中では充分に捉えられてこなかった編集者としての五百木飄亭の活動を詳らかにし、彼が残した業績の歴史的意義について再評価を試みることにある。研究の手法としては、史料実証主義に基づいた歴史学の手法を採用する。具体的には、飄亭が編集者として関わった活動の要所を、時系列に即しつつ、史料にもとづいて明示したあとで、それらの意義について考察を行っていく。

1ー2. 飄亭の出版人としての業績および俳人としての評価

飄亭が関与した代表的な出版物には以下のものがあげられる。まず、正岡子規と共同で『富士のよせ書』という研究書を編纂している。その後、正岡子規が編集長を務めた新聞『小日本』において雑報を担当し、日清戦争後には、新聞『日本』で貴族院担当の記者として活躍した。貴族院議長であった近衛篤麿が主宰した経緯社の雑誌『東洋』の編集長として割愛された後、再び日本新聞社に戻って編集長として『日本週報』などを手がけた。日露戦争の前年に日本新聞社を辞したあとは、出版やジャーナリズムの世界から離れて政治活動に傾注する。この間の業績は、政治活動に関するパンフレットを数点発行した程度である。その後、1929 年に乞われて政教社の社長に就任し、死去するまで雑誌『日本及日本人』を主宰した。また、これらの業績のほかに、医学専門紙に関与したことや、俳誌『芭蕉』や『鶏頭』などに連載を持っていたことが明らかになっている。本稿では、以上の業績の中から、飄亭が中心となって編集に携わった事例について考察し、先行研究で触れられてこなかった彼の生涯における転機と出版およびジャーナリズムとの関係について明らかにする。

こうした飄亭の業績において、俳句は重要な意味を持つものである。しかし、本稿では主旨と異なるため飄亭の詠んだ句を具体的に取り上げて分析することはしていない。とはいえ、飄亭が俳人としていかなる評価を得ていたのかという点に関しては、史料で確認できる範囲において明らかにしておく必要があるだろう。そこで、本論に入る前に、同時代人による飄亭の評価を整理しておきたい。

まず、飄亭に「文学的感化」を与えた正岡子規は、俳人としての飄亭をどのように評価していたのであろうか。飄亭が政治活動に傾注するようになる以前の、1896年10月頃に書かれた人物評から引いてみたい。

> **明治二十二三年の頃より多少俳句に心ざしゝ者五百木飄亭、新海非風の二人あるのみ。非風早く文学を廃し東西に流浪し俗界の人となる。残る所只飄亭あり。飄亭の文学に於ける一種の天才あり、一たび文学趣味の上に大悟せし後は滔々数千言猶尽くる所を知らず、恰も大地裂けて熱泉涌くの勢あり。其俳句に於けるも亦然り。明治二十三四年の頃吾人の俳句は未だ俳句を為さゞるに当りて飄亭の句已に正を成す**(5)。

このように、明治23年（1890年）頃においては、子規より飄亭の方が俳人として優れていたことを述べている。この頃は、本稿で取り上げる『富士のよせ書』を2人で編纂した時期にあたる。しかし、飄亭自身が「仕事が多かつた為め、二十九年頃から我輩は、俳句の方をやつてゐられなくな(6)」ったと述懐しているように、飄亭は新聞記者としての仕事に追われ、また政治活動に熱中していくうちに、自ら俳界から距離を置くようになるのである。

子規の弟子である河東碧梧桐や高浜虚子にとっても、飄亭は一目置く存在であった。河東碧梧桐と高浜虚子は、京都の第三高等中学校の学生であった1893年に飄亭と会している。その時の印象について、碧梧桐は次のように振り返り、飄亭を讃述している。

> **飄亭は、見るもの聞くものを珍しがって、郵便配達がノロノロ歩いていると言って笑った。梅畑の婆さんの紺の前掛がいいと嬉**

しがった。そうして十歩に一句、二十歩に一句と吐いた。それが皆事実ありのままの叙事であって、そうしてちゃアんと一句にまとまっていた。私はその豪傑笑いの尾について空虚な笑い声を立てながら、その尽きない句作に心から驚かされてしまった。平生見なれ聞なれていたものが、飄亭の句によって美化されて行く輝かしい世界に幻惑されてしまった。

私は何よりもこの時始めて写生の意義を明かに体得したことを感謝せねばならなかった。人の見ないものを探ったり、滅多に気づかないものを見つけることが写生の真意義ではないのだ、という抽象論を具体化した詩人飄亭を心から渇仰せねばならなかった(7)**。**

高浜虚子もこの時の様子を、「その年の十二月に京都の吉田の下宿に除隊になつた飄亭が国に帰る序に立ち寄つて初めて遭つたのであります。下宿には碧梧桐も同居して居つたので、二人とも学校に出かけて居る時分に飄亭はその辺を散歩して沢山の句を作って戻って来る。又三人で一緒に散歩をする時でも多量の俳句を作るといふ有様で、私達は其すさまじい勢に少々、驚かされたものでありました」と述懐している(8)。

碧梧桐が「十歩吟」と評し、虚子も驚嘆させられた圧倒的な多作は、当時の俳人としての飄亭の特徴を捉えたものである。その多作ぶりは兵役を共にした佐藤肋骨の回想からも窺うことができる。

明治廿五年には青山の兵営内に飄亭君を中心にした四人の俳句仲間が存在し、所謂「子規派の兵隊組」として知られたものである〔中略〕。この頃開催された俳句会で今記憶に残つて居るものは飄亭君の下宿龍岳窟での会と古白君の下宿であつた戸塚の畑の中の藁家での会であつた。〔中略〕この場合飄亭君にいつも咄嗟的に奇想天外の句をならべて全勝を博したものである(9)**。**

これらの評価に関しては、飄亭の生前に書かれたものも、飄亭の死後に追悼記事として寄せられたものも含んでいる。そのため、こうした文章が書かれた背景も考慮しなければならないが、同時代人による

飄亭に対する俳人としての評価は決して低いものではなかった。少なくとも、「日本俳句草創期」の主要人物の一人として認知されていたことは間違いないと言えるだろう。

以上、少々長い紹介となったが、本論で扱う飄亭の編集者としての道が拓かれるためには、正岡子規からの信頼を得ていたという点が不可欠な要素となるため、史料をもとに詳述した。こうした背景と前掲の問題意識をもとに、飄亭の編集者としての活動に関して具体的に見ていきたい。

2．医学から「文芸方面」への転身

2－1. 医学と漢学の修養

1883年の秋、愛媛県は松山病院の構内に県立医学校を開設した。この前年に、文部省が医師養成の教育機関を整備する目的で「医学校通則」を公布しており、同校はこれを受けて設立されたものである。1883年に生徒の募集が行われ、実際の講義は翌年に入ってから実施された。五百木飄亭は、この松山県立医学校に1885年に入学している。

当時の医学校は甲種と乙種に分けられており、松山県立医学校は乙種の学校であった。「乙種ハ簡易ノ医学科ヲ教授シ以テ医師ノ速成ヲ図ル[10]」ためのものであり、甲種の学校と比べて修業年限が短く、設置される必修科目の数も少なかった。しかし、卒業時に医術開業免許状が下付される甲種に対して、乙種の場合は国家試験に合格しなければ免状を得ることができなかった[11]。

こうして松山に新設された医学校で、飄亭は勉学に励んでいたわけであるが、1886年9月に愛媛県は突如として松山県立医学校の廃止を決定する。廃校の理由は、「乙種校は十分な専門教育が施されず入学希望生徒の僅少であることが松方デフレによる経済恐慌下の財政窮迫での整理の対象とされた[12]」ためであったという。医学校が廃校となってしまった飄亭は、翌1887年に大阪に上り、今橋5丁目で開業してい

た小野田医師のもとに寄寓して、医学の実地を学びながら試験に備えた。こうして、飄亭は1888年に19歳で内務省所管の試験に合格し、開業免許状を取得したのであった。

また、飄亭は松山県立医学校に通っていた同じ時期に、河東静渓の主宰する千舟学舎にも入塾しており、ここで漢学を修めている。河東静渓は藩校明教館の教授を務めた人物であり、のちに新傾向俳句によって大成する河東碧梧桐は静渓の五男にあたる。同郷の正岡子規も千舟学舎で学んでいるが、子規は飄亭よりもおよそ3才年上であり、1883年には上京して共立学校に入学している。そのため、松山時代の2人には直接の交流はほとんどなかったと考えられる。

千舟学舎では、河東邸の敷地内に塾生用の長屋が建てられており、十数名の塾生が寝食を共にして生活したという。静渓の四男である河東蕭城の回想には、「良三君を入塾前より松山の県立医学校に通学して居りし為、其入塾は通学の便宜が主なる目的なりしならんも、塾生の課業なる朝未明の素読生に対する助読、午後の経書の聴講史子の輪講など缺さず出席して、四五歳も年長の諸生に伍し、更に劣る處なく、其の識見文章の其根を此時に培養した[13]」とあり、飄亭が千舟学舎の寮から医学校に通っていたことがうかがえる。ただし、飄亭の千舟学舎への入塾が松山県立医学校への入学の後であったかは定かではない。それは、飄亭とともに千舟学舎に入塾した従兄の藤田禎一郎の回想によれば、千舟学舎への入塾は1882年ないし1883年頃で、そこから中学校に通ったとあるからである。なお、藤田禎一郎は「十五六年頃から松山市千舟町に在りし儒者河東坤先生の塾に我等両人茲でも揃つて入塾し同師の厚き指導を受けた。要は彼の風格と精神と漢学的素養は茲にて此師より培養せられたりと信ずる[14]」とも述べており、先の蕭城の述懐と同じく、飄亭の素養がこのころに培われたものであることを指摘している。

2―2. 正岡子規との出会い

さて、10代で開業医の免状を取得した飄亭であったが、未成年のう

ちの開業は認められていなかった。そこで、1889年にドイツ語の勉強を目的として上京し、旧伊予藩主の久松家が育英事業として経営していた常磐会の寄宿舎（現在の文京区本郷4丁目付近）に入る。この前年、常磐会には第一高等中学校本科への進学を期に正岡子規が入舎していた。正岡子規は一高の予科生の頃に大原其戎から俳諧の指導を受けており、一時は哲学に関心を寄せたものの、飄亭と出会った頃にはすでに文学に志を持っていたと言ってよい。飄亭は、この頃に正岡子規から「文学的感化」を受けたことに関して、次のように書き記している。

> **確か明治二十一、二年頃と思ふが、内藤鳴雪翁が舎監をやつてゐた常磐舎で我輩は子規を知つたのである。それ以前には我輩は他の人々とは違ひ、少々方面違ひの医学を大阪で勉強してゐたのであるが、開業医の免状を得たので、今度は大いに独逸語を研究してみようといふ志で上京し、国の久松伯が経営してゐた常盤舎へ這入つたのである。当時正岡は一高に通つてゐたが、文学を志して、俳句を勉強したりしてゐた。我々は此の時、初めて文学、特に俳句を子規より手ほどきされたのである。〔中略〕さうして寄宿舎内丈けの回覧雑誌を出して銘々に勝手なことを書き合つてゐたのだが、正岡は之に文学論や俳句を記してゐた。我々は此の雑誌を中心として、正岡から大いに文学的感化を受けたのであつた**[15]。

かくして、飄亭は常磐会で出会った正岡子規の影響を受けて、文学、とくに俳句に身を入れることになるのである。もともと、飄亭の意識には「医学を修学の動機はそこなら学資を出すと云はれたからであつて、好きで選んだのではない[16]」という気持ちがあった。父親の勧めのまま医師の免状を取得したものの、飄亭は郷里を遠く離れた東京の地で、あらためて自分の進むべき道を模索した。飄亭自身が、「我輩は医学を勉強したのだが、医者が嫌ひで何か他にやりたいと思つていた所へ、正岡の感化影響で、文学へ頭を突込み、いつか文芸方面へ進み出した[17]」と振り返っているように、このようにして飄亭の「文芸方面」への道が拓かれることになったのである。

五百木飄亭は、正岡子規が俳句に目覚めて試行錯誤した時期、つまり習作期とも言うべき時期を共に過ごした。子規と飄亭の文学上の親交は書簡からも窺うことができる。例えば、飄亭は兵役のために1892年に常磐会寄宿舎を出るのだが、その頃に子規が飄亭に宛てた手紙を見ると、「爾後文況如何。此頃は一題百句といふこと相はやり、已に相すみ候もの鹿、露、蕃椒の三題也。今は笠（秋季）百句の考中也。吾兄も仲間入りし給ふては如何[18]」とあり、新しく始めた「一題百句」という試みについて、飄亭を勧誘している様子が窺える。子規が手紙で誘っているように、飄亭は休みの日に子規のもとを訪ねては句作に興じていたようである。1891年に松山から上京して、当時、常磐会寄宿舎に入っていた河東碧梧桐は、飄亭が子規の部屋を訪ねてきたときの様子を次のように語っている。

> **兵隊の服装をした人が、日曜によく子規の処へ遊びに来た。一人は五百木飄亭で、今一人は新海非風であった。その外にも連れ立って来る兵隊さんが二、三人あった。〔中略〕**
>
> **飄亭は故郷で父の千舟学舎の塾生であったこともあり、十九で医者の前期後期の免状もとった秀才というので、会えばきっと言葉をかわしながら、心から親しむ気持よりも、遠くから尊敬している心持だった。まだ丁年前後の若さでありながら、物に動じない落ち着きと、深く物を考え入っているとも見える凹んだ羊のような目つきとは、大抵の人が人相を一変する兵隊の幾何学的の線の交錯と、生ま生ましい原色の露出である色彩でさえも覆い紛らすことは出来なかった。飄亭は生れつき色が黒かった。が、その色の黒さは、この人がどういう未来を持つかの運命の謎を一層深くするのに役立っていた。〔中略〕**
>
> **時折この二人が子規の部屋に落ち合う時などは、時代物、世話物、悲劇喜劇の役者ぞろいと言った形で、歓楽は他の舎室を圧していた[19]。**

このように、子規にとって飄亭は親交の深い人物のひとりであった

ことがわかる。先の子規から飄亭に宛てた「一題百句」の書簡においては、俳句に関する話題に加えて「小生両三日来、痰に血痕を印し候へども格別の事もなかるべと歩行なども致居候處、今にやまず殊に今朝のはやや深紅に相成候故、何となく宸襟安からず候。尤名にしあふ根岸には竹庵先生許り故、いまだたれの診察も乞はず。敢て大兄の御處方を請ふ」とあり、医者である飄亭に結核の症状を相談している姿も窺える。このように、子規にとって飄亭の存在は、俳句の同志であるとともに、年下ながらも頼れる友人であったことが分かる。

2ー3.『富士のよせ書』の編纂

このように文学上の親交を深めていった飄亭と子規は、常磐会寄宿舎に居た際、共同で『富士のよせ書』という3巻立ての本を編纂している。

『富士のよせ書』は、古くからの文献を渉猟して富士山に関する記述を蒐集したものであり、古来日本人がいかに富士山を見てきたのかをまとめたアンソロジーである。一種の富士山事典であるとともに研究書としての性格をもつ『富士のよせ書』は、以下のような構成となっている。第1巻には、地誌、紀行文、随筆といったいわゆるノンフィクションの作品から蒐集した内容が収められている。第2巻の表紙には「和歌・俳句」とあるが、ここに俳句はおさめられておらず、ページ数もこの第2巻だけが他に比べて少ない状態になっている。ここに俳句が収められていない理由については、元々ここに収めた富士に関する俳句を、あとになって正岡子規が俳句分類の作業を行った際に別に移したことが指摘されている[(20)]。第3巻では、「狂句・狂歌・都都逸・端唄・小説・院本・音曲・和文・漢文・詩」と、その他の雑多のものから富士に関する記述を抜き出したものが収められている。

この本は公刊されたものではないため、正確な成立時期は明らかになっていない。成立時期に関しては、例えば、同じ講談社版の『子規全集』に寄せられた解説文においても見解が分かれている。第20巻附録の月報12号に収められている新田次郎「富士のよせ書に寄せて」で

は、「『富士のよせ書』は子規と五百木飄亭との共同編集といわれているが、出来上った年代も明治22年頃という漠然としたものではっきりしていない」と記されているのに対し、第20巻に収められた上田三四二「解説・事典的方法」においては、「『富士のよせ書』は明治23年、子規数え年24歳のころに主として蒐集が進められ、その翌年に完成したと推定される」と書かれている。これらの点に関しては、1890（明治23）年の飄亭と子規の手紙のやり取りの中で同書の作業について触れられているため、1889（明治22）年頃に成立していたとする説は明らかな誤りである。

この『富士のよせ書』に関しては、正岡子規が中心となって編纂したものであり、飄亭がその作業を援けたかのように論じられる嫌いがある。例えば、『子規選集』（増進会刊）の編者であり、「折々のうた」でも著名な大岡信は、『富士のよせ書』に関して「子規は飄亭に指示して、いろいろ下調べをさせた」という見解を述べている[21]。また、飄亭の名があまり知られていないためか、『富士のよせ書』については「これは途中から正岡子規一人では出来なくて寒川鼠骨にも手伝ってもら[22]」ったと、別の人間と間違われたと思われる例さえみられる。寒川鼠骨は子規より8歳年下で、当時はまだ松山にいる人物であり、同書の編纂に関わったとは判じ難い。ただし、正岡子規は1890年に松山に帰省しているため、その際に寒川鼠骨と何らかの接点があった可能性は否定しない。

しかしながら、本稿ではこのような見解に対して、以下の観点から『富士のよせ書』の編纂は五百木飄亭が主体となって行ったものであり、正岡子規が補佐を担ったものと考える。『富士のよせ書』の各巻の表紙には、それぞれに次のように記名されている。

第1巻「ふし乃よせ書」　鐵面生・馬骨生 編
第2巻「富士のよせ書」　飄々堂主人・スケ獺祭漁史
第3巻「富士乃与勢書」　飄亭編輯・西子補助

このうち、「鉄面生、飄々堂主人」は飄亭のことである。これは当時、

飄亭が正岡子規に宛てた書簡にある「花のお江戸本郷の里真砂の尽きぬ数の十八番常盤の色の濃きうちに住ふなる　飄々堂鐵面再拝[23]」という記述から見ても明らかである。一方の「馬骨生、獺祭漁史、西子」はそれぞれ正岡子規の別号である。第３巻を見ると、「西子補助」とあり、編輯は飄亭が行ったと明記されている。第２巻には、獺祭漁史の上に「スケ」の文字があり、この「スケ」が第３巻で記された「補助」と同じ意味と思われる。第１巻には、作業分担を示す記述は見られないが、連記されている２人の名前の序列に着目した場合、常に飄亭が縦書きにおける上位の右側に位置している点は重要である。飄亭がこの編纂作業において主格であったことの証左とも言えよう。第２巻、第３巻の記名の仕方と照らしてみても、第１巻の内容も飄亭が主体となって編集を行ったと見做すべきであろう。原史料に即するかぎり、飄亭を子規の補佐役として捉えることは、誤りであると言わざるを得ない[24]。

図　『富士のよせ書』第１巻～第３巻の表紙

（出典：国立国会図書館デジタルコレクション）

また、飄亭が『富士のよせ書』の編纂作業の主体であったことは、大正末期にアルス版『子規全集』を企画して発刊させた俳人の寒川鼠

骨による、「富嶽に関する文献集の一編の如きは、名は二人の合著であるが其草稿の今猶ほ子規庵に残つてゐるのを見ると、子規居士の筆に成るものは極めて小部分で、十中の八九は飄亭君の筆に成つてゐるのだ。如何に熱心に図書館通ひをして集めたものであるか、推察に餘りあるので、英俊と健筆とに於て、一歩も子規居士に負けぬものであつたことを證してゐる[25]」という、草稿の筆跡に基づく見解からも明らかである。

次に、具体的な収集作業の様子について見ていく。1890年は子規が高等中学を卒業し、9月から帝国大学に入学する年にあたる。子規は高等中学を卒業後、いったん松山に帰省しており、その間に交わされた書簡において『富士のよせ書』に関する作業を確認することができる。

> **御留守中家事万端用心堅固に候。火の要心もいと厳重に候。当地雨はかり毎日／＼たいくつ千万なり。富士のよせがき百余枚出来たり。然しまだ十分の一と申處にも致らす。〔中略〕雨のため毎日図書館へ通えず空をにらんで怒るのみ。集中歌発句地理等一番沢山あり。今頃は歴史地理等に取りか丶れりとても夏休中にはおぼつかなし[26]。**

このように飄亭は松山にある子規に作業の進捗状況を伝えている。また、この手紙から、資料の収集作業は上野の東京図書館に通って行っていたことが分かる。現在の本郷4丁目にあった常磐会寄宿舎から東京図書館のある上野公園までは至便であったと思われるが、それでも梅雨の季節には毎日通うことができずに不満を感じていた様子がうかがえる。一方、子規は「富士のよせがき百余枚出来候由祝着存候。しかし百枚や二百枚にては中々富士山を貼り尽すことは出来ざる故御辛抱の程奉願候[27]」との返事を書いている。この返書を受けた後、飄亭はさらに子規に対して「此節暑さ中々にて骨も肉もとろけん計り、それ故図書館の方も暫時鼬の道切りとなり、従てふじ山も未だ裾野にていたづらに八朶をなかめ居る耳、らちのあかぬことにて候。大器晩成先づあちつきかへりをり候。又々その内にはちりも積ればとやら完

全な山も出来上がるべし[28]」と書き送り、作業の遅滞を伝えている。

ただし、すでに20歳になっていた飄亭は、1890年の秋には徴兵に甲種合格して、以後3年間の兵役生活に入ることになる。そのため、飄亭による収集作業は、それ以前に大方の作業を終えていたものと考えられる。兵役によって飄亭が残すことになった作業を子規が補ったという意味で、子規の名前に「補助」と記した可能性もあるが、現存する史料だけでは実証し得ないため、ここに付記するにとどめる。

メディア史の観点からこの『富士のよせ書』の特徴をあげるとするならば、まずは富士を題材とした文学作品を蒐集した画期的なアンソロジーとしての特徴があげられる。3巻構成の本書の中で引用された書目は170種余りにも及び、江戸以前の富士山に関する記述が集められている。この事典としての意義を有する資料としての価値のほかに、『富士のよせ書』は時代的な成立条件もメディア史上の特徴としてあげることができる。すなわち、いくら当時の書肆に近世以前の文献が残っていたとしても、まだ学生であった子規や兵役に就く頃の飄亭に170種余りの資料を個人で集められるわけがなく、2人の書簡から作業の様子が窺えたように、これらの底本のほとんどが上野の東京図書館の蔵書に拠ったものと推測される。つまり、『富士のよせ書』の成立は、明治20年代に近代的な図書館が整備されたことが学問的な発展の画期となったことを示す事例として位置づけられるのである。

この『富士のよせ書』は、一般に正岡子規の研究編著として知られており、飄亭が子規を補佐したものと解されることもあったが、本稿で指摘したように飄亭が果たした役割については過小評価されていると言わざるを得ない。『富士のよせ書』は、この後に新聞社や雑誌社の編集長を務めることになる飄亭が初めて成した編集作業である。すなわち、『富士のよせ書』は、従来の研究の中で指摘されてきたように子規にとっては「俳句分類」に連なる作業として位置づけられる一方、のちに新聞や雑誌の編集に携わるようになる飄亭にとっても、初めて本格的に実践した編集作業として位置づけることができる作品なので

ある。こうした子規との共同作業を経て、文学上の信頼関係を築いたことは、兵役後に子規の周旋によって記者生活をはじめることにも繋がっていくことになる。

3．文芸からの乖離と政治への傾注

3－1.『小日本』記者

飄亭が兵役に就いていた1892年、子規は帝国大学を中退して日本新聞社の社員となった。硬派な政論によって発売頒布禁止処分に遭うことの多かった日本新聞社は、明治27年2月に本紙『日本』とは別に、別働隊として『小日本』を創刊している。硬派な本紙との差別化を図るため、『小日本』は小説などを掲載する家庭向きの紙面が企図され、子規がこの新しい新聞の編集長を任された。そこで、子規は前年に兵役を終えていた飄亭を『小日本』の記者として招き入れている。飄亭は除隊を前にして、「追々除隊近き候。サア／＼どうしよう／＼と今に泣づらかくこと眼前に相迫り候が、さりとてあはて候ても何のやくに立ち申間敷おかしなものに候。なるべくならハ本職ハやめたく存居候。是非こらへねハ糊口的にやらねハならぬときも有べしといいつゝやりたくなし。右御含み被下度願上奉り候[29]」と、医者を続ける意思のないことを子規に相談していたのであった。

子規に『小日本』に招かれた飄亭は、この新聞の三面記事を担当した。こうして新聞記者となった飄亭は、当時のことを次のように述べている。

> **我輩をして、元来厭であった医者の学問を断然茲に思ひ切らして、己れの好いた方向に自由の翼をのばさせしめたのも、直接でないが自然彼〔子規のこと：引用者註〕の感化で有たらう。我輩をして新聞記者の見習生として、此の活社会に接触させたのも彼であった。然り明治廿七年二月二十一日の紀元節に生れた『小日本』は、実に書生生活より直に兵隊生活に入った所の我輩をして、**

初めて此の活社会に接触せしめた舞台であって、爾後今日に至る迄『日本』の編集室の一隅に其の見習生を継続しつつあるのは、全く彼の斡旋と誘掖とによるのである[30]。

このように飄亭にとって子規は、まさに人生の転機をもたらした人物であった。しかし、朝鮮の政情をめぐって日本と清国間で緊張が高まったことで、6月15日に飄亭のもとに召集令状が届き、広島へ向かうことになる。こうして、飄亭の『小日本』における記者生活は僅か4ヵ月で終わったのであった。

3－2.「従軍日記」連載

広島に滞在中の飄亭に対して、正岡子規は「朝鮮事件いよいよものに相成候様にていさましく候。病院付と御変り被成候由御渡韓などは思ひもよらぬ事と存候。〔中略〕御多忙と御不平とは思ひやられ候へども時々は五頁種御製造御送付被下度候[31]」といった書簡を送っている。こうした要望に応え、看護長として日清戦争に従軍することになった飄亭は、戦地から日本新聞社の子規宛てに「従軍日記」を書き送り、これが本紙『日本』に連載されることとなった。

犬骨坊の号で連載された「従軍日記」は、明治27年8月29日から翌年8月3日にかけて、73回に分けて掲載されている。写生的な俳句を交えた文章を特徴とした飄亭のリポートは好評を博し、通常3面に掲載されたこの「従軍日記」は1面にも29回登場している。この連載の中で挿入された飄亭の俳句は475句を数え、これは1回あたり平均して6～7句の俳句が載せられていた計算になる。俳句紀行の趣を持ちつつも生々しい戦場の様子を活写した「従軍日記」によって、飄亭は大いに文名を馳せることとなった。この「従軍日記」の連載が始まってから8ヶ月後、1895年4月には正岡子規も病を押して従軍を志願し、「陣中日記」と題した連載を始めている。「陣中日記」も俳句を交えた見聞録の体裁を採っており、写実的な俳句を交えて戦地の様子を伝えた飄亭の「従軍日記」の影響がうかがえる。

日清戦争の終結後、飄亭は召集前に勤めていた『小日本』が廃刊に

なってしまっていたため失職した状態にあった。そのため、正岡子規は飄亭の行く末を案じて、「大兄方向については今後如何なされ候や。それも伺度又愚考をも申上度存候へども書面にては尽きまじく、いづれ帰郷の節、御面会の上と致すべく候。但し、御考案も有之候はゞ至急御報下され度候。事によれば、陸に依嘱する事にも相成申べく或は万一陸の方で予め一考する所ありしかも知れずと存候。併し、これは憶測故其つもりにて御含み置被下度候[32]」といった手紙を書き送っている。子規が新聞『日本』社長の陸羯南に頼んで、飄亭の就職を周旋しようとしていたことがうかがえる。この結果、飄亭は正式に日本新聞社の社員となり、しばらくして貴族院の担当をまかされるようになった。

3―3. 経緯社および日本新聞社の編集長

当時の貴族院議長であった近衛篤麿は、もともと対外硬運動を通して陸羯南ら日本新聞社の面々とは交流の深い人物であったが、飄亭も次第に近衛の知遇を受けるようになる。飄亭自身、「私は正岡子規と一緒に俳句をやつたりして、その関係で日本新聞へ入つたので、最初は文芸を以て立たうなどと考へてゐたのですが、一度公爵に御縁があつて以来、すつかり方針が変わつてしまつて、対外問題に没頭するやうになつた[33]」と述べている。次第に政治問題に傾注するようになった飄亭の関心は、文芸から乖離していったのである。こうした飄亭の変化を正岡子規は快く思わなかったようであり、この時期の飄亭に対して置酒豪遊と文章の冗長さを諌めるかたちで苦言を呈している[34]。

この近衛篤麿との出会いが、飄亭にとっての第2の転機となる。義和団事件のあとに設立した国民同盟会の会長となった近衛篤麿は、その機関紙的な役割を果たす雑誌の創刊を計画し、1901年に経緯社を立ち上げるのであるが、ここで発行する雑誌『東洋』の編集長に飄亭を抜擢し、日本新聞社から引き抜いたのである。1901年3月10日付の近衛篤麿の日記には「面会 陸実 日本社より五百木を経緯社に転せしむる事に付相談其他」と記されている[35]。雑誌『東洋』は1901年4月か

ら同年12月まで半月刊の形で17冊が発行されており、飄亭は近衛篤麿の片腕となって同誌の編集にあたった[36]。

その後、1902年1月に近衛篤麿が日本新聞社に出資する約束が交わされると、経緯社の社員を日本新聞社が引き受けることや、雑誌『東洋』と日本新聞社が毎週月曜日に発行していた『日本週報』とが合併すること等が決まった[37]。この取り決めによって、飄亭は日本新聞社に編集長の立場で復帰することとなった。五百木飄亭を編集長に就かせた近衛篤麿の底意には、自らの翼下で動く人物を編集の責任者に置くことによって、日本新聞社に対して金銭面の庇護者であることにとどまらず、実質的に編集面で影響力を行使しようとしたことがうかがえる。しかし、まだ若い飄亭の編集長就任は、先輩らの嫉視を受けて円満にいかなかったことを、当時記者として日本新聞社にいた寒川鼠骨が次のように述懐している。

> **飄亭君の編輯長就任は抜擢であるが順序を過つて居ると反感を抱く者もあつた。其爲めに働らかない者が多かつた。現今の新聞のやうに材料の多い中から選り食ひすることは出来ず、登載材料の少いのに苦しむ場合が多かつた。それに働らかぬ者が多いのだから猶更ら材料難を告げたが飄亭君は、そんな事にはビクともしない。午後三時締切りに至つて工場から未だ何段足りませんと警告して來る事が屢々あつた。ソンナ時には君は直ちに「よし來た」と言つて傍らに在る私を顧み「おれが一段書くから君も一段やつて呉れ」といふ。二人で筆を執つて漸く間に合せるやうな事が屢々あつた。そんな事が度重なるので、私は「又埋め立て工事かな」と言つて笑ひ乍ら取掛ると君は「ホントダまるで二人は埋め立て係だね」など言つて大笑したこともあつた[38]。**

こうして日本新聞社に復帰後、編集長自ら閑文字を埋めるような仕事に追われることとなった飄亭は、次第に近衛篤麿を中心とした対露問題をめぐる実践的な政治活動の方へ傾注していくようになる。

4．政教社社長時代

4－1．句作の再開

正岡子規が逝去した翌年、1903年の秋に飄亭は日本新聞社の編集長としての立場だけでなく、新聞記者としての職そのものを辞した。これは、かねてより志を移していた政治活動に専念するためであった。政治活動の要であった近衛篤麿が1904年の初めに薨去するという不運に見舞われるものの、これ以後、飄亭は日露講和条約反対運動や日韓併合推進運動、宮中某重大事件に関わる運動などに関与していく。

政治活動に奔走した時期の飄亭の活動については、ほとんど記録が残されていない。しかしながら、1911年に興った子規庵保存会に名を連ねるなど、俳句を通じて築いた人脈との交流も維持していたことが確認できる。政教社の『日本及日本人』が正岡子規号を企画した際も、子規との思い出を寄稿している。

政治活動に従事していたあいだは、そもそも句作に興じる機会は少なかっただろうが、例えこの頃に作品がつくられていたとしても、それらは政治活動の関係で家宅捜索を受けたときに押収された物品に紛れたか、関東大震災の災禍で焼失した可能性が高く、現存していないと見做すのが妥当である。

しかしながら、1924年末に同人から句作を求められたことを契機として、翌年初春から句日記を認めるようになり、20余年ぶりに文芸活動を再開する。その経緯を、飄亭自身の記述から引くことにする。

> **余の俳句は子規を中心とせる明治俳句革命の原始時代に属し、二十七八年日清役当時新聞「日本」に連載せる従軍日記（犬骨坊の名にて）に終れり。爾後日本記者として社務に追はれ、境遇の変と共に句作の余地もなく興趣も起らず、漸次俳界を脱して既に二十有余年に及びぬ、此の間偶々興にふれて発するの句も多くは一時の即興として記憶に留むるなく、多少記録せしものも十二年の大震災に焼失して悉く烏有に帰せり。然るに十三年末、雑誌芭蕉社**

同人来つて切りに余の駄作を求めしを動機とし、死灰再燃の縁ありてや俳想微かに動くを覚え、十四年初春より句日記を思ひ立つに至れり、而も本年に入りて政海波瀾漸く重畳し来るにつれ、自から詩情興らず、句作も亦甚だ疎也。果して今後幾日を継続するや、我ながら心細し。

大正十五年三月　　飄亭誌[39]

こうして、数え33歳で日本新聞社を退社してから、只管、浪人の立場で政治活動を行ってきた飄亭は55歳に至って再び句作を行うことになった。また、五百木飄亭が社長を務めていた時期に政教社にいた阿部里雪は、1932年に俳誌『鶏頭』を創刊するために飄亭に相談を持ち掛けた際、「俺は日比谷の焼き打ち事件のあった時、日記をつけていたのを警視庁の家宅捜索で見つけられ友人たちに迷惑をかけたことがあった。爾来日記は句日記にした[40]」という話を聞いたことを述べている。これらの作品は飄亭の死後、政教社から『飄亭句日記』として刊行された。そこに収められた内容は、「『鶏頭』所載のもののほか、寒川鼠骨氏刪定の「句日記抄」と政教社同人であった雑賀博愛氏所蔵の写本2冊を加え大正14年1月から最後の昭和12年6月までの句日記が収録[41]」されたものである。

4－2.『日本及日本人』

句作を再開したとはいえ、あくまで飄亭の関心は政治にあり、それは1929年9月に乞われて政教社の社長に就任してからも変わらなかった。政教社の発行する『日本及日本人』は、かつて飄亭が編集長を務めた新聞『日本』の流れをくむ雑誌である。1923年に同誌で内紛が起きて以後、飄亭は政教社後援会に名を連ねて陰に陽に同社を援助してきた。その縁から、経営難に陥っていた同誌の再建を期待されて社長を任されたのであった[42]。

飄亭は1929年の社長就任直後と、1935年の夏の2度にわたって『日本及日本人』の誌面改革を実施している。政教社社長に就任した当初は、【表】にも見られるように自ら筆を執る機会は少なく、編集にもあ

まり口出しをしなかったようであるが、1935年の誌面改革以降は、毎号自ら署名入りで論説を掲載するようになる。飄亭は当時、天皇機関説排撃運動から国體明徴運動に関与しており、『日本及日本人』は実質的に飄亭の政治活動と連動した誌面構成を取るように変化している。

こうした政論以外においても、文芸に関する誌面の変化が見られた。飄亭の社長就任当時、『日本及日本人』には子規の系譜を継ぐ「日本俳句」欄が置かれており、この選者を河東碧梧桐が務めていた。しかし、飄亭は碧梧桐が提唱していた新傾向を俳句と見做さなかったため、193号（1930年1月15日発行）から「三昧句」欄へと改称させている。この名称は、1925年に河東碧梧桐が中心となって創刊された雑誌『三昧』によった新傾向の一派に由来するものである。なお、「日本俳句」欄の名称は1937年に碧梧桐が逝去した後、寒川鼠骨の選によって復活している。

また、飄亭の社長時代、1931年に政教社から村上霽月が『霽月句集』を出版しているが、ここに飄亭が序文を寄せている。この中で飄亭は「今や我が俳壇の盛んなる、真に千紫万紅の観がある。而かも党を組み派を樹てゝ互に覇を争ふ。当さに落花繚乱の一戦場である」と当時の俳壇を評している。飄亭がこうした文学に関する意見を披瀝する機会は、政論の掲載に比べてはるかに少ないが、1936年1月4日には「国体観念と俳句」を題したラジオ講演を行っており、時局問題を俳人としての立場から論じるといった試みもみせていた。

表　政教社社長時代における五百木飄亭の『日本及日本人』掲載記事一覧

西暦	号	発行日、掲載頁	記事タイトル	署名
1929年	188	11月1日、4-18頁	日本民族の個性と其使命	無署名
1931年	223	4月15日、76頁	「霽月句集」に題す	飄亭
1932年	251	6月15日、76頁	「聖雄押川方義」に題す	飄亭
	261	11月15日、5-9頁	日満両国民の使命	五百木良三
1934年	290	2月1日、59-88頁	近衛霞山公追憶座談会記	五百木良三ほか
	295	4月15日、2-3頁	日満国民大交驩会開会の辞	五百木良三
	305	9月15日、67-73頁	我が見たる子規	五百木飄亭

1935 年	318	4 月 1 日、2-10 頁	所謂機関説問題は昭和維新第二期戦展開の神機	五百木良三
	319	4 月 15 日、2-6 頁	東は王道の和光、西は覇道の暗影	五百木良三
	319	4 月 15 日、7-8 頁	逆縁的使命	無署名
	326	8 月 1 日、2-10 頁	先づ此の妖雲を排し此の魔気を払え	五百木良三
	327	8 月 15 日、108 頁	奥多摩涼味即興	飄亭
	329	10 月、2-6 頁	白人文化の自壊作用	五百木良三
	330	11 月、2-6 頁	国運の進展と国体問題の推移	五百木良三
	331	12 月、2-6 頁	歩々是れ維新道場	五百木良三
1936 年	332	1 月、4-8 頁	昭和維新第三期	五百木良三
	333	2 月、2-6 頁	歩々の進出と歩々の退却	五百木良三
	333	2 月、84-87 頁	国体観念と俳句	五百木飄亭
	334	3 月、2-6 頁	是亦維新の一過程	五百木良三
	335	4 月、3-6 頁	時局観片鱗	五百木良三
	336	5 月、2-6 頁	次で来る問題	五百木良三
	337	6 月、2-3 頁	無言の主張	五百木良三
	338	7 月、2-6 頁	独歩の国運	五百木良三
	339	8 月、2-6 頁	行くべき順路	五百木良三
	340	9 月、2-6 頁	天祐か神罰か	五百木良三
	341	10 月、2-6 頁	皇化使命必然の一道程	五百木良三
	342	11 月、2-6 頁	赤魔調伏は世界平和の先決要件	五百木良三
	343	12 月、2-6 頁	此の一年	五百木良三
1937 年	344	1 月、4-8 頁	戦国の春	五百木良三
	344	1 月、90-98 頁	「防共協定を語る」日独懇談会	五百木良三ほか
	344	1 月、259-275 頁	「ソヴェート生活」を語る座談会	五百木良三ほか
	345	2 月、2-6 頁	順当なる維新過程	五百木良三
	346	3 月、2-6 頁	自然日本への還元作用	五百木良三
	346	3 月、48-56 頁	「オーディエ大佐」と語る座談会	五百木良三ほか
	347	4 月、2-6 頁	時局収拾の要諦	五百木良三
	347	4 月、109-112 頁	革命児碧梧桐	五百木飄亭
	348	5 月、2-6 頁	是亦た時代促進の一転機	五百木良三

結語

冒頭に掲げたように、本稿の目的は、五百木飄亭が編集者として携わった活動を詳らかにし、彼が残した業績の歴史的意義について再評価を試みることにある。飄亭に関しては近年、＜浪人＞としての生涯を論じた評伝や政治活動に関する論考が発表されているが、その著作や出版ないしジャーナリズムに関する業績に関する考察は充分に行われてこなかった。そうした問題を補完することが研究上の位置づけでもある本稿に関して、得られた知見を以下にまとめることで結びに代えたい。

まず、本稿のはじめに記した同時代人の評価でも明らかなように、明治期における飄亭は、正岡子規に伍して草創期の俳界を牽引するだけの実力を備えていた。この時期に子規と編纂した『富士のよせ書』に関しては、従来、子規が飄亭の手助けを得て編んだものであるかのように論じられてきたが、原史料や周辺人物の回想などをもとに再検討した結果、飄亭の果たした役割が大きい作品であったことを明らかとなった。また、メディア史の観点からも、特筆すべき特徴をもつ作品であることを指摘した。

飄亭が医者の仕事を擲って文芸をもって身を立てようと決心した際に、記者の仕事を世話したのは子規であったが、その背景には、句作や『富士のよせ書』の共同編纂といった作業による文学を通じた信頼関係があったといえる。飄亭の写生を旨とした句作の才は、子規をはじめ碧梧桐や虚子ら弟子筋も認めるものであったが、17字の中に「見るもの聞くもの」を「事実ありのままの叙事」としてまとめる飄亭の観察眼と表現力は、日清戦争期に「従軍日記」として遺憾なく発揮され、子規の周旋によって記者としての道を拓いたのであった。

なお、この時期に俳人としての飄亭を高く評価していた子規は、飄亭に宛てた手紙の中で「小生の共に心を談ずべき者唯貴兄あるのみ[43]」と述べている。「文学はやうやく佳境に入りぬ」と締めくくられる子

規の書簡の中でも有名なこの手紙は、自分に残された時間の少なさと後継者を得られない焦りの感情が爆発したものであり、「病魔に襲われた者の、その発病時に感ずる発作のように、未来を否定する一種の幻想である[44]」とさえ評されたものである。だが翻ってみれば、子規にとって飄亭は、それだけ精神的に衰弱したときでさえ頼ることのできる相手であったとも言えるだろう。総じて、正岡子規の習作期にあたる時期を『富士のよせ書』を編纂するなど共に過ごしたことは、飄亭が筆で身を立てるという人生の道筋を定める重要な出来事であった。

しかし、その後、飄亭は記者の仕事で出会った近衛篤麿を中心とした対外硬派の運動に感化され、文芸から離れて政治活動に傾注するようになっていった。近衛篤麿のもとで雑誌『東洋』や新聞『日本』および『日本週報』の編集長を務めた時分には、近衛篤麿のアジア主義にもとづく主張を口述筆記によって論説にまとめるなどの経験をし、自ら実践的な活動に身を置くようになったのである。その一方で、数え32歳の若さで編集長となった日本新聞社では先輩記者の嫉視を受けて苦労を重ねたことも明らかとなり、こうしたことも飄亭が新聞社を辞して政治の世界に入っていった背景にあったことを明らかにした。

晩年は、『日本及日本人』に掲載した数々の論説や、文芸関連の記事において「国体観念と俳句」といった論題から見られるように、彼の表現活動は政治的な活動と不可分のものであった。また一方で、この時期の飄亭は編集者ないし出版経営者としての才能を発揮している。政教社の経営を任された飄亭は、誌面改革と人脈を駆使した資金集めで一時的に経営を安定させることに成功した。また、飄亭が主宰した『日本及日本人』は政論中心の雑誌であったが、和歌・俳句・漢詩を扱う文芸欄が常設されており、俳誌などの専門雑誌とは異なる立場から近代日本文学の一翼を担っていたと言えるだろう。

本稿では、その目的において飄亭の編集者としての業績に関して彼の生涯を総体的に扱って論じることを主眼としたため、個々の事象に

関して細かく論究する遑はなかったが、従来の研究で看過されていた『富士のよせ書』や、飄亭の内在的な変化を探るうえで重要な契機に関わる事柄を新らたにすることができた。とくに一部の先行研究による『富士のよせ書』の編纂に関する誤りを正した意義は大きい。こうした知見が、五百木飄亭研究およびメディア史研究だけでなく、文学研究など周辺の領域にも波及することを期して、まとめに代えたい。

脚注

（1） 以下、本稿では号を使用しはじめた時期を問わず飄亭と呼称する。なお、飄亭は政論の執筆など政治的な活動においては本名の「五百木良三」を用い、文学に関する活動においては「五百木飄亭」を用いていた。

（2） 松本健一（2012）『昭和史を陰で動かした男　忘れられたアジテーター・五百木飄亭』新潮選書、9頁および18頁。なお、同書に関する書評論文には、石川徳幸（2013）「松本健一『昭和史を陰で動かした男　忘れられたアジテーター・五百木飄亭』」（『史叢』第88号所収、51～58頁）があり、同書の特長と問題点が示されている。

（3） 石川徳幸（2013）「対外硬派と櫻田倶楽部：小川平吉と五百木良三の活動を中心として」（『法政論叢』49巻2号所収）、石川徳幸（2014）「ロンドン軍縮条約反対運動における政教社に関する一考察」（『政経研究』第51巻第2号所収）など。メディア史上の業績に関しては、石田惟道「五百木良三社長時代の政教社を対象としたメディア史研究の射程」（『メディア学』第33号所収）が詳しい。

（4） 五百木飄亭に関して論じたものには、以下のものが挙げられる。柴田宵曲（1943）「五百木飄亭」『子規居士の周囲』六甲書房、亀田小蛄（1960）「五百木飄亭と正岡子規」『大阪経済評論』43巻9号所収、阿部里雪（1961）「五百木飄亭」『子規門下の人々』愛媛タイムス、亀田小蛄（1967）「五百木飄亭居士の寸描」『子規時代の人々』うぐいす社、山上次郎（1972）前掲書。

（5） 正岡子規（1927）「五百木飄亭」『俳諧大要』所収、友善堂、175頁。初出は、『日本人』明治29年10月5日号、および『ホトヽギス』第1巻第4号（明治30年4月号）。

（6） 五百木飄亭（1928）前掲書、99頁。

（7） 河東碧梧桐（2002）前掲書、231頁。

（8） 高浜虚子（1937）「五百木飄亭」『日本及日本人』351号、194頁。

（9） 佐藤肋骨（1937）「日本俳句草創期の子規と飄亭」『日本及日本人』351号、12頁。

(10)　「医学校通則（明治 15 年文部省達第 4 号）」『法令全書 明治 15 年』内閣官報局、780 頁。

(11)　「明治 15 年太政官布達第 4 号」『法令全書 明治 15 年』内閣官報局、99 ～ 100 頁。この布達には、「文部卿ノ認可ヲ得左ノ條件ヲ具ヘタル医学校ノ卒業生ハ詮議ノ上試験ヲ要セス直チニ開業免状ヲ下付スル」とあり、その条件には「四年以上ノ学期ヲ定メ」るものとあるため、修業年限が 3 年しかなかった乙種の医学校は、この特例に該当しなかったことが分かる。

(12)　愛媛県史編さん委員会編（1987）『愛媛県史 社会経済 6（社会）』愛媛県。デジタルデータベース「えひめの記憶」愛媛県生涯学習センターを参照。

(13)　河東蕭城（1937）「五百木君と千舟学舎」『日本及日本人』351 号所収、8 頁。

(14)　藤田禎一郎（1937）「幼かりし日の思ひ出」『日本及日本人』351 号所収、7 頁。

(15)　五百木飄亭（1928）「追憶断片」『日本及日本人』160 号所収、98 頁。

(16)　今村道子（1937）「病床に於ける父の言葉」『日本及日本人』351 号所収、155 頁。

(17)　五百木飄亭（1928）前掲書、98 頁。

(18)　高浜清編（1907）『子規書簡集』上巻、俳書堂、pp286-287。明治 25 年 9 月 9 日付、五百木飄亭宛正岡子規書簡。

(19)　河東碧梧桐（2002）『子規を語る』岩波文庫、49 ～ 51 頁。底本は汎文社版、昭和 9 年。

(20)　蒲池文雄・白方勝「解題」（1976）『子規全集』第 20 巻所収、740 頁。

(21)　大岡信（1995）『正岡子規』岩波書店、203 頁。

(22)　大岡信（1999）『名句歌ごよみ秋』所収、角川文庫、262 頁。

(23)　『子規全集』別巻 1、講談社、24 頁。明治 23 年 7 月 8 日付正岡子規宛五百木飄亭書簡。

(24)　前掲の蒲地・白方（1976）前掲論文においても、「少なくとも巻二、巻三は飄亭が主として作業に当った」としている。ここでは、「子規の性格からすれば、この収集の発想と主導権は、やはり子規にあったとみるのが妥当であろう」との解釈もなされているが、史料で確認できる範囲においてはどちらの発想であったのかは定かではない。

(25)　寒川鼠骨（1937）「追憶何にや彼や」『日本及日本人』351 号所収、19 頁。

(26)　『子規全集』別巻 1、講談社、25 頁。明治 23 年 7 月 8 日付正岡子規宛五百木飄亭書簡。

(27)　『子規全集』第 18 巻、講談社、160 頁。明治 23 年 7 月 16 日付五百木飄亭宛正岡子規書簡。

(28)　『子規全集』別巻 1、講談社、27 頁。明治 23 年 7 月 19 日付正岡子規

宛五百木飄亭書簡。

(29)　『子規全集』別巻 1、講談社、34 頁。明治 26 年 2 月 26 日付正岡子規宛五百木飄亭書簡。

(30)　五百木飄亭（1936）「嗚呼子規」河東碧梧桐編『子規言行録』所収、政教社、pp38-39。復刻版は長谷川泉監修（1993）『近代作家研究叢書 133「子規言行録」』日本図書センター。

(31)　『子規全集』第 19 巻、講談社、477 ～ 479 頁。明治 27 年 7 月（下旬）五百木良三宛正岡子規書簡。

(32)　高浜清編（1907）前掲書、501 ～ 505 頁。

(33)　「近衛霞山公追憶座談会」『日本及日本人』290 号、85 頁。

(34)　『子規全集』第 19 巻、講談社、210 ～ 215 頁。明治 30 年 11 月 4 日付五百木良三宛正岡子規書簡。

(35)　『近衛篤麿日記』鹿島出版会、1901 年 3 月 10 日。

(36)　経緯社の雑誌『東洋』に関しては、石川徳幸「雑誌『東洋』と『日本週報』」（『出版研究』43 号所収、2013 年）が詳しい。

(37)　『近衛篤麿日記』鹿島出版会、1902 年 1 月 7 日。

(38)　寒川鼠骨（1937）前掲書、22 頁。

(39)　五百木飄亭（1958）『飄亭句日記』政教社、1 頁。

(40)　阿部里雪（2004）『新編 子規門下の人々』愛媛新聞社、272 頁。

(41)　阿部里雪（2004）前掲書、137 頁。

(42)　飄亭の政教社社長就任の経緯に関しては、石川徳幸「ロンドン軍縮条約反対運動における政教社に関する一考察」（『政経研究』第 51 巻第 2 号所収、2014 年）を参照。

(43)　『子規全集』第 18 巻、講談社、642 頁。明治 28 年 12 月（10 日頃）五百木飄亭宛正岡子規書簡。

(44)　河東碧梧桐（2002）前掲書、296 頁。